

金子みすゞ童謡の露訳における 翻訳方法

——詩的翻訳における問題とその解決方法を
めぐって——

スベトラーナ・ジガチョーワ

1. はじめに

2023年は、童謡詩人金子みすゞの生誕120年である。分かりやすいことばで書かれた彼女の童謡は、120年の間、日本人読者の心を掴み、また、さまざまな言語にも翻訳されてきたが¹、ロシア語には翻訳されておらず、そもそもロシアでは日本の童謡をめぐる研究がほとんど行われていない。本論は、金子みすゞの露訳に挑戦する第一歩として、まず詩を翻訳する際の問題について考察したい。

そもそも詩とは何かを定義することは容易ではない。詩は文芸の一部で、韻文で書かれたもの、というのが通念であるが、詩には、さまざまな言語学上の特徴に加え、歴史、文化、個人的な側面も含まれる。さらに、詩は読者に美的感覚を与えるという点で、芸術の一つだとされている。このような詩は、世界の文学にとって貴重なものでありながらも、その翻訳については、20世紀の初頭以来今日まで深刻な議論のテーマであり続けている。

たとえば、ドキュメンタリースタイルの写真家兼文筆家・編集者であるウォーカー・エヴァンズ（Walker Evans 1903-1976）は、写真を翻訳として取り扱う立場から、文学作品の翻訳は不可能だという判断に至ったと述べている²。たしかに詩を言語Aから言語Bに翻訳しようとする際の困難さゆえに、エヴァンズに同感する翻訳家は少なくはないだろう。翻訳の基礎となる“adequacy”「妥当性」、*“equivalence”*「等価」、*“precision”*「精度」の達成が不可能ということを意識させられるからである。

しかし、翻訳というのはテクニカルな作業というよりも、新しい芸術作品を創作するようなアートに近いものである。芸術の側面から見ると、この三つの翻訳の軸とされる“adequacy”「妥当性」、*“equivalence”*「等価」、*“precision”*「精度」は、あくまで主観的な概念と思われる。

あえてエヴァンズに倣って翻訳を芸術に例えると、翻訳はドキュメンタリー写

真ではなく、リアリズム主義における絵画と言える。たとえ現実に近いようにしても、画家（翻訳家）という主体の影を消すことはできない。そして、画家である詩の翻訳家は、目的や自分自身のスタイルによって翻訳作品の形式を創る。それゆえ、原作は一つであっても、その翻訳、および翻訳の方法は一つとは限らない。

しかし、そのように考えても、翻訳作品は、所詮、原作の模倣にすぎず価値がない、という批判はあり得る。この批判への答えとして翻訳が“何のために”そして“誰のために”するかを鋭く意識して行われるものであることを挙げたい。とりわけ“誰のために”とは、詩を読む読者のためということである。つまり、翻訳の正確さを最終的に決めるのは、読者である。文芸翻訳家は「翻訳だと感じない作品であれば、翻訳は成功した」と言う³。

本論も金子みすゞの童謡を、“何のために”そして“誰のために”を意識して翻訳するものである。ただし、ただ読者にとって読みやすい詩の翻訳を提供するだけでなく、研究者、翻訳家、日本語母語話者に受け入れられる作品を創作することをめざす。そのため、どのようにして翻訳をするかという翻訳へのアプローチ、翻訳方法に関する議論は極めて重要である。金子みすゞの童謡のロシア語への翻訳という実践を通じて、その翻訳過程の中で見出される問題点を示しつつ、さまざまな翻訳手法を提案し、童謡や詩の翻訳が可能であることを明らかにしていきたい。

2. 詩を翻訳するためのポイント

著名な記号学者・文化歴史学者であるユーリ・ロトマン (Y. Lotman 1922-1993) によれば、詩の特徴は3つに分けられる。1つ目は、言語的な特徴で、ライム（押韻）、リズム、音節、行と連の数、イントネーション、メロディーなどの他、隠喩、直喩、などの比喩を用いることである。2つ目は、言語外的な特徴である。例えば、作家の個人的な特徴や文化的、歴史的、社会的な特徴などが挙げられる。3つ目は美学的な構想（アイデア）である。原作の意味をすべて伝えようとすると、翻訳することはたちまち困難になってしまう⁴。

言語学者・翻訳理論家・詩の翻訳学派の創始者のエフィーム・エトキント (E. Etkind 1918-1999) によれば、詩の翻訳という作業は原作と翻訳作品の間の交点を見つける能力から始まり、つまり損失を被ったり、工夫したりする技術である。全てをそのまま他の言語のシステムに移動させるより、失った要素を別のもので補い、詩の軸となるアイデア、即ち3つ目の特徴を必ず伝達すべきであると述べている⁵。これをソ連時代の童謡詩人・翻訳家・文芸評論家のコルネイ・チュコフスキー (K. Chukovsky 1882-1969) のことばで言えば、「笑顔を笑顔として翻訳すべき」ということである⁶。言い換えると、ことばの意味を正確に伝える

以上に、作者の一番伝えたい目的や作品世界の雰囲気といった美学的なイメージを伝えるほうが重要なのである。

日本の詩は西洋の詩と比べると、様々な相違点がある。まず、ロシア語の持つ西洋の韻律（アクセントまたは強勢を伴う音節）に対し、日本語には音素の体系や拍（モーラ）があるため、日本の詩ではライム（押韻）が重要な要素ではなく、それより、形式による音調が問題となる。さらに、日本の伝統的な和歌などの詩歌は、テーマとコンセプト（物の哀れ、余情、幽玄、わび・さび等）が日本の伝統的な信仰（神道や仏教など）、そして美学的な世界観と密接に繋がっているので、ロシア語に翻訳することは容易ではない。

その一方で、近代詩の一種である童謡は、伝統的な特徴を持つだけでなく、西洋の詩のように形式も自由になり、繰り返し（リフレイン）や対句（パラレリズム）というレトリックの他、ライムも使用するようになった。

日本の詩をどのようにロシア語に翻訳したらよいかという問題に移ると、ロシアの研究界では日本の定型詩の翻訳の仕方はある程度明確になったが、近代詩の翻訳方法の研究はわずかしかない。ロシア国立研究大学経済高等学校教授で、定型詩・新体詩の翻訳家であるアレクサンドル・ドーリン（A.Dolin 1949-）⁷の研究によると、定型詩の韻律・音節数をロシア語に移動させようとするれば、ロシア語の自然さを破壊することとなる。それを避けるためには、詩の内容を深く理解した上で、リャザン国立大学教授で、翻訳家であるヤコフ・コルケル（J.Kolker 1938-2023）⁸が行った、翻訳方法を用いることが有効である。コルケルは、詩の形式とその内容は切っても切り離せない関係にあり、両者は詩の意味を構成する重要な要素であり、翻訳をする場合でも可能な限り原詩の形を保持したまま訳すべきであるとした。

そこで、以上の研究者・翻訳家の翻訳研究の成果を踏まえるならば、翻訳を可能なものにするために、次のようなステップを踏む研究が必要と思われる。

- （１）翻訳前の分析：言語外的特徴（詩人の生涯と人柄、歴史的、文化的な背景）
- （２）翻訳前の分析：言語的特徴（ジャンル、詩の形式と内容、詩人が選ぶテーマ等）
- （３）翻訳の分析（翻訳過程そのもの）
- （４）翻訳後推敲（訂正）

まず初めに、（１）言語外的特徴と（２）言語的特徴を示すために、翻訳以前の詩の分析を行う。そして、（３）翻訳の分析では最も適当な翻訳語の選択をする。最後に、（４）翻訳後修飾、つまり、翻訳した詩を原詩と比較しながら、訂正することである。以上の手順に従い、金子みすゞの作品の分析を行いたい。

3. 金子みすゞの童謡の露訳のための4段階

(1) の言語外的特徴は矢崎節夫、今野勉、松本侑子などの日本の研究者によって研究が進められている⁹。そこで、本論文では、(1) についてはそれらの先行研究に委ねて、今後の研究課題のみを記すこととし、金子みすゞの作品をテキストとして解釈をし、その作品の中にある日本の伝統の受容（七五音調、美的感性、幽玄、信仰等）について検討する。

(1) 翻訳前の分析：言語外的特徴（詩人の生涯と人柄、歴史的、文化的な背景）

これについては、日本では金子みすゞに関する研究がいくつかある。将来、矢崎節夫、今野勉、松本侑子らの研究に基づき、みすゞの詩を聞いたことのないロシアの読者のために詳細な説明を加えるとともに、それらの日本の研究の翻訳をしたいと考えている。

(2) 翻訳前の分析：言語的特徴（ジャンル、詩の形式と内容、韻律と音律の比較等）

これについては、日本の童謡というジャンルがロシアではいまだ知られておらず、そのため、童謡に関わる日本の研究をまとめて、ロシア語に翻訳する必要がある。その他、「童謡の世界の中の金子みすゞの位置付け」、「金子みすゞのイギリス童謡詩人クリスティーナ・ロセッティの受容」¹⁰、「童謡と和歌の繋がり」などのテーマを開拓したい。

また、みすゞの作品は音声的な構成も注目される。坂野信彦の「日本語リズム原論」を使ってみすゞの童謡を分析すると、彼女の歌では二音基調、七五・五七調の取り扱いが巧妙である。この音律は調和の印象を与えるだけでなく、作品の意味を強調するために用いられている。すなわち、音律も意味を持つということである。今後の研究では韻律（日本語の音律）の翻訳の問題も触れる必要性も明白ではあるが（特に坂野信彦「二音基調」に注目したい¹¹）、この論文では、単純な図式で日本語版とロシア語版の音の違いを示すことに留める。

(3) 翻訳の分析（翻訳過程そのもの）

金子みすゞの童謡の露語訳を下記の5編の作品から始めたい。各編がそれぞれ独自のテーマに触れる有名な詩でありながらも、ロシア語に訳しにくいところがあるので、これらの翻訳の仕方について論じる価値がある。翻訳を提示するにあたり、2種類の表を使用する。「内容」の表では、原詩、筆者の露語訳、1行ずつの筆者のロシア訳詩の日本語訳と露語訳の発音の対照を示す。「形式」の表では、形式の詳細として、原詩と原詩の音律（拍数）、そして露語訳の発音と韻律を示す。西洋詩学の詩法では、韻脚を表示するには一般的に「〇」（強）、「_」（弱）「|」（句切れ）という記号が用いられるが、本論文では単なる「oOo」（弱強弱）を使用する。また、さまざまな下線や太文字で韻を踏む要素を強調する。1行ずつの

日本語訳の取消線を引いたことばは露語訳では現れないことを示す。

原詩の作品の本文は『新装版・金子みすゞ全集』¹²に拠る（以下、「新装版全集」）。

（４）翻訳後推敲（訂正）

翻訳を完了後、訂正作業を行い、各編の注釈に問題点を記す。

翻訳実践に入る前に、筆者の翻訳の方針を確定したい。金子みすゞの童謡の特徴は「音楽性」と言える。以上の４段階の翻訳過程を踏まえて、露語訳が唄えるものとなっているかどうかという点も翻訳の正確さを評価する基準となる。筆者の翻訳も、金子みすゞの詩の「音楽性」を重視している。辞書¹³を引くと、童謡とは「子供のために作られた詩」という説明が記載してあるが、本論では、翻訳した童謡の対象読者は子どもに限らない。深い意味と考えさせるメッセージを有する金子みすゞの童謡の翻訳は、日本文化と日本文学に関心のある方のために創られたものとする。

４．翻訳実践とその結果

第一節「はじめに」で述べたように、詩は芸術作品の一種であり、その解釈、すなわち翻訳は一つとは限らない。本節で紹介する金子みすゞの童謡の露語訳は、４段階の翻訳過程に基づく結果である。今後、金子みすゞの童謡に関する筆者の研究が深まるに連れて、第４段階「翻訳後推敲（訂正）」に戻る可能性もあることを前もって断っておく。

Ⅰ．「私と小鳥と鈴と」（「空いろの帆」、新装版全集Ⅰ、145頁）

この作品は、金子みすゞの作品の中でも最もよく知られているものの一つである。意味の深さだけでなく、西洋文学における押韻に似た音の繰り返しも、この作品の顕著な特徴と言える。

まず、「内容Ⅰ」の問題点を挙げる。最も大きな問題点の一つは、第２連の「体を揺する」の翻訳の仕方である。「体を揺する」をそのままロシア語にすると、ロシアの読者に奇妙なイメージを呼び起こしかねない（「体を揺する」という動作自体が好ましくない印象を与えるため）。そのため、「体を揺する」の行為に喩えた比喩的な表現である「体が絨にならない」という翻訳を考えてみた。しかし、この翻訳の仕方では、この詩の肝心な「鈴」の形象が失われてしまうため、結局「体を揺する」を直訳することにした。ただし、「揺する」の意味のロシア語のことばの中からより文学的な動詞を選択し、原詩の雰囲気伝えるようにした。また、詩の形と美学的印象は詩のことばによって形成されるため、語の選択には一定の傾向を持たせるようにした文学的な語を選んだ結果、翻訳は長くなり、原詩と文体がやや異なっている。

内 容 I

原 詩	翻 訳
私と小鳥と鈴と 私^が両手をひろげても、 お空はちつとも飛べないが、 飛べる小鳥は<u>私のやうに</u>、 ちべた はや 地面を速くは走れない。 私^がからだをゆすつても、 きれいな音は出ないけど、 あの鳴る鈴は<u>私のやうに</u>、 たくさんな唄は知らないよ。 鈴と、小鳥と、それから私、 みんなちがつて、みんないい。	Я, п т и ч к а и к о л о к о л ь ч и к Даже если руками взмахну<u>я</u> - Не взлететь мне в небесную высь. Но и птичке, что славно порхает, Не дано бежать по земле. Если телом своим содрогну<u>сь я</u> - Не прольётся мелодия - звон. А колокольчик, вот, не узнает Разных песен, известных мне. Колокольчик, и птичка, и я - Мы различны, но все хороши.
1 行 ず つ の 翻 訳	ロ シ ア 語 の 発 音
私と小鳥と鈴と 私^が両手をひろげても、 上空は飛べないが、 よく飛べる小鳥は<u>私のやうに</u>、 地面を速くは走れない。 私^が体をゆすつても、 きれいな鳴る音・メロディー は響かないけど、 あの鳴る鈴は<u>私のやうに</u>知ら ないよ、 私^が知っているたくさんな唄 は。 小鳥も、鈴も、私も、 わたしたちはちがうけど、み んないい。	Ja, ptichka i kolokol'chik Dazhe esli rukami vzmakhnu<u>ja</u> - Ne vzletet' mne v nebesnuju vys'. No i ptichke, chto slavno porh<u>aet</u>, Ne dano bezhat' po zemle. Esli telom svoim sodrogn<u>us' ja</u> - Ne prol'jotsja melodiya - zvon. A kolokol'chik, vot, ne uzn<u>aet</u> Raznyh pesen, izvestnyh m<u>ne</u>. Kolokol'chik, i ptichka, i ja - My razlichny, no vse horoshi.

「形式 I」で明らかのように、西洋詩に身近な押韻をロシア語にはほぼ変更せずに訳すことができた。ただし、日本語の音律（拍数）とロシア語の韻律の言語的な違いが大きいため、音の数のパターンを変更せずに移すことは難しい。この翻訳では、ロシア語の詩的な形式を優先することにした。

形式 I

原 詩		音 律	
1	私 が / 両 手 を / ひ ろ げ て も	1	1 3 (4 - 4 - 5)
2	お 空 は / ち つ と も / 飛 べ ない が	2	1 3 (4 - 4 - 5)
3	飛 べ る / 小 鳥 は / 私 の や う に	3	1 4 (3 - 4 - 7)
4	地 面 を / 速 く は / 走 れ ない	4	1 3 (4 - 4 - 5)
5	私 が / から だ を / ゆ す つ て も	5	1 3 (4 - 4 - 5)
6	き れ い な / 音 は / で ない け ど	6	1 2 (4 - 3 - 5)
7	あ の 鳴 る / 鈴 は / 私 の や う に	7	1 4 (4 - 3 - 7)
8	た く さ ん な 唄 は / 知 ら ない よ	8	1 3 (5 - 3 - 5 / 4 - 4 - 5)
9	鈴 と / 小 鳥 と / そ れ か ら 私	9	1 4 (3 - 4 - 7)
1 0	み ん な / ち が つ て / み ん ない い	1 0	1 2 (7 - 5 / 3 - 4 - 5)
翻 訳		韻 律	
1	D a z h e e s l i r u k a m i v z m a k h n u j a	1	o o O o o O o o O o / 1 0
2	N e v z l e t e t ' m n e v n e b e s n u j u v y s '	2	o o O o o O o o O / 9
3	N o i p t i c h k e , c h t o s l a v n o p o r h a e t	3	o o O o o O o o O o / 1 0
4	N e d a n o b e z h a t ' p o z e m l e	4	o o O o O o o o O / 9
5	E s l i t e l o m s v o i m s o d r o g n u s ' j a	5	o o O o o O o o O o / 1 0
6	N e p r o l ' j o t s j a m e l o d i j a - z v o n	6	o o O o o O o o O / 9
7	A k o l o k o l ' c h i k , v o t , n e u z n a e t	7	o o o O o o o o O o / 1 0
8	R a z n y h p e s e n , i z v e s t n y h m n e	8	o o O o o O o O / 8
9	K o l o k o l ' c h i k , i p t i c h k a , i j a	9	o o O o o O o o O / 9
1 0	M y r a z l i c h n y , n o v s e h o r o s h i	1 0	o o O o o O o o O / 9

Ⅱ. 「蜂と神様」（「空のかあさま」、新装版全集Ⅱ、10頁）

この作品は、神道のアニミズムと仏教の「世界の全てのものの繋がり」を表す詩である。詩の行が進むにつれて世界が徐々に広がっていく。露語訳では美しい押韻を作ることができたが、そのために原詩のイメージの表現の仕方を少し工夫せざるを得なかった。永遠に広がっていくような渦巻きの動きを、円の形に取り入れた。原詩では、蜂は神様の中にいて、そうして神様は小さな蜂の中にいる。この蜂は同じなのか違うのか明白していないが、蜂と神が繋がっているのは確かである。原詩では恐らく最初の第1行と最後の第9行の蜂は違う可能性が高いが、翻訳では第1行の蜂は改めて第9行に登場する。そして、その蜂は、実は神様であったという。原詩と翻訳のイメージの動きが異なるが、どちらも永続性に反しないので、原詩の意味を保持をすることができたと思う。

内容の問題点について述べると、まず「神様」という語の翻訳の仕方に関して考えさせられた。ロシア正教の「神」の概念を交えないよう注意が必要である。筆者は以前に、最後3行「世界は神さまのなかに。そうして、そうして、神さまは、小ちやな蜂のなかに。」を“A Zemli, a Zemli, a Zemli etoi Tvorets v malenkoi Pchele zhilets”（この地球、この地球、この地球の創造神はちっちゃな蜂に住んでいる）として翻訳したことがある。これは韻律の点でも好ましいし、広がっていくという動作を表すには最も適当な表現に見えたが、創造神の概念に神道と仏教が交ざるかたちになってしまい、原詩の文化と意味を伝える点では適切ではないと思った。訂正の段階で、「神様」の意味を保持するために文法的な変更を試みた（内容Ⅱの下線部参照）。

この他にも、もう一つ重要な語の変更を行った。「ロシア語の使用者向け」、そして韻律の構成を考慮して、第1連第5行と第6行の「日本」の代わりに、「一般化」という翻訳技術を使用して「世界の千の国の一つ」として翻訳することにした。しかし、この選択肢の理由と原詩のことばを詩の解釈に必ず記載すべきであると考える。

原詩の文法を分析すると、「お」の美化語が目につく。この敬語文法に相当することばがロシア語に存在しないため、訳するのが難しい。その代わりに、詩人が伝えようとした「全てのものの命の大切さ」を表すために、露語訳の各名詞を大文字で強調した。

内 容 II

原 詩	翻 訳
はち 蜂と神さま 蜂はお花のなかに、 お花はお庭のなかに、 お庭は土塀^{どべい}のなかに、 土塀は町のなかに、 町は日本のなかに、 日本は世界のなかに、 世界は神さまのなかに。 さうして、さうして、神さまは、 小ちやな蜂のなかに。	Пчёлка и бог Пчёлка в маленьком Цветке, Цветов много во Дворе. Двор забором ограждён, В некий город помещён. Город в небольшой стране, Одной из тысяч на земле. Если Мир объёмлет Бог, И внутри него Пчела. То Пчела, то и Пчела То же Божеством была.
1 行ずつの 翻 訳	ロ シ ア 語 の 発 音
蜂と神さま 蜂は小さいお花のなかに お花はお庭にたくさんある お庭は土塀に囲まれて ある町に置かれる 町は日本世界の千の国の一つである 小さな国のなかに 神さまは世界を抱いていて 世界の中に蜂がいたのであれば その蜂も、その蜂も 神さまであつた	Pchjolka i bog Pchjolka v malen'kom Tsvetke, Tsvetov mnogo vo Dvore. Dvor zaborom ograzhdyon, V nekij gorod pomeschyon. Gorod v nebol'shoj strane, Odnój iz tysjach na zemle. Esli Mir objemlet Bog, I vnutri nego Pchela, To pchela, to i pchela Tozhe Bozhestvom byla.

形式に関して言えば、原詩の語彙と文法の単純さを露語訳に移動させると、詩情を失ってしまう。そのため、原詩の軽快な雰囲気を保ちつつ、ロシアの童謡らしい子供の遊びの数え歌のような音調（弱強四歩格のイアンボス）で表すことにした。

形 式 II

原 詩		音 律	
1	蜂 は お 花 の な か に	1	1 0 (3 - 7)
2	お 花 は お 庭 の な か に	2	1 1 (4 - 7)
3	お 庭 は 土 堀 の な か に	3	1 1 (4 - 7)
4	土 堀 は 町 の な か に	4	1 0 (4 - 6)
5	町 は 日 本 の な か に	5	1 0 (3 - 7)
6	日 本 は 世 界 の な か に	6	1 1 (4 - 7)
7	世 界 は 神 さ ま の な か に	7	1 2 (4 - 8)
8	さ う し て 、 さ う し て 、 神 さ ま は	8	1 3 (4 - 4 - 5)
9	小 ち や な 蜂 の な か に	9	1 0 (4 - 6)
翻 訳		韻 律	
1	P ch j o l k a v m a l e n ' k o m T s v e t k e .	1	<u>O o O o O o O / 7</u>
2	T s v e t o v m n o g o v o D v o r e .	2	<u>o O O o O o O / 7</u>
3	D v o r z a b o r o m o g r a z h d y o n .	3	<u>O o O o O o O / 7</u>
4	V n e k i j g o r o d p o m e s c h y o n .	4	<u>O o O o O o O / 7</u>
5	G o r o d v n e b o l ' s h o j s t r a n e .	5	<u>O o O o O o O / 7</u>
6	O d n o j i z t y s j a c h n a z e m l e .	6	<u>o O o O o O o O / 8</u>
7	E s l i M i r o b j e m l e t B o g	7	<u>O o O o O o O / 7</u>
8	<u>I v n u t r i n e g o P c h e l a</u> <u>T o p c h e l a , t o i</u> <u>p c h e l a</u>	8	<u>O o O o O o O / 7</u> <u>O o O o O o O / 7 (1 4)</u>
9	T o z h e B o z h e s t v o m b y l a .	9	<u>O o O o O o O / 7</u>

Ⅲ. 「さびしいとき」(「獨樂の實」、新装版全集Ⅱ、176頁)

この作品の言う「寂しいとき」は、大抵の人間が共感できる感情だろう。ただし、異文化コミュニケーションの一環である翻訳の過程では、人間的な共通点と同時に文化的な違いにも注目する。この詩で詠まれるみすゞの寂しさは、「佛さま」に関連している。しかし、ロシアの読者にこのまま伝えようとするとう理解されない可能性が高い。日本語の原詩の仏教的な考え方を伝えるためには、文化の違いの壁を乗り越える必要がある。原作のメロディーを保持しつつ、この壁をどのように乗り越えるかが、この詩を翻訳する際の筆者の課題であった。

例えば、最後の「佛さまはさびしいの」をロシアの読者に分かりやすくするには、「佛さま」の代わりに「神」、「主」、英語の“Lord”の意味をする“Gospod”として翻訳しても良いか、検討を重ねた。ロシア人にとって「佛さま」は馴染みがなく、「私」と仏との関係は一体どのようなものなのか理解しにくく、詩のメッセージを受け止めそこなう恐れがあるからである。さらに、「子供向け」の翻訳でもあるので、ロシア人の子供の背景知識にはない概念は変えるべきである。この視点から考えると、「神」や「主」も十分に理由があるが、形式も内容も正確に翻訳するのが第一目的とする筆者の立場からすると、「佛さま」は「神」ではないので、“Budda”と翻訳することにして、そして、その注釈を追加することが良いと考えた。

この他にも、語の変更を行った。ロシア語の韻律を守るには、第2連の「笑ふ」ということばを変えざるを得なかった。「私がさびしいときにお友だちは笑ふの」という文の意味を解釈することが鍵となる。私が寂しい時に、一番理解してくれるのは私の心の中にある仏様である。お母さんは良く私のことを知っていて、いつも優しいが、100パーセント私の気持ちを分かってくれるわけではない。一方、未知の人は私のことを全く気にしない。そして、他人でもないし、かといって家族の一員でもない「友だち」は私のことをある程度知っているが、私が辛いときに、この辛さの理由が分からなくても支えてくれる人物ではないだろうか。そこで、この「支えてくれる」の意味を持ち、翻訳の形式に合う表現として「友達は歌を歌うの」という表現に思い至った。

内 容 Ⅲ

原 詩	翻 訳
さびしいとき 私がさびしいときに、 よその人は知らない<u>の</u>。 私がさびしいときに、 お友だちは笑ふ<u>の</u>。 私がさびしいときに、 お母さんはやさ<u>しいの</u>。 私がさびしいときに、 佛さまはさび<u>しいの</u>。	К о г д а о д и н о к о К о г д а м н е о д и н о к о , Д р у г о й о т о м н е з н а е т . К о г д а м н е о д и н о к о , Д р у г п е с н и н а п е в а е т . К о г д а м н е о д и н о к о , М а т ь л а с к у п р о я в л я е т . К о г д а м н е о д и н о к о , Л и ш ь Б у д д а п о н и м а е т .
1 行 ず つ の 翻 訳	ロ シ ア 語 の 発 音
さびしいとき 私がさびしいときに、 よその人は知らない<u>の</u>。 私がさびしいときに、 お友だちは<u>歌を歌う</u>の。 私がさびしいときに、 お母さんはやさ<u>しいの</u>。 私がさびしいときに、 仏さまだけ共感するの（分かつてくれる）。	К о г д а о д и н о к о К о г д а м н е o d i n o k o , D r u g o j o t o m n e z n a e t . К о г д а м н е o d i n o k o , D r u g p e s n i n a p e v a e t . К о г д а м н е o d i n o k o , М а т ' l a s k u п р о j a v l j a e t . К о г д а м н е o d i n o k o , L i s h B u d d a п о n i m a j e t .

「形式Ⅲ」の表のように、原詩の押韻が注目される。フレーズの末尾が1行おきに韻を踏んでいる。日本語の音律とロシア語の韻律を比較すると（原詩の4行目を抜きに）、ロシア語に問題なく同じリズムのパターンを移すことができた。

形 式 Ⅲ

原 詩		音 律	
1	私 が さ び し い と き に	1	1 1
2	よ そ の 人 は 知 ら な い の	2	1 1
3	私 が さ び し い と き に	3	1 1
4	お 友 だ ち は 笑 ふ の	4	1 0
5	私 が さ び し い と き に	5	1 1
6	お 母 さ ん は や さ し い の	6	1 1
7	私 が さ び し い と き に	7	1 1
8	佛 さ ま は さ び し い の	8	1 1
翻 訳		韻 律	
1	K o g d a m n e o d i n o k o	1	o O o O o O o / 7
2	D r u g o j o t o m n e z n a e t	2	o O o O o O o / 7
3	K o g d a m n e o d i n o k o	3	o O o O o O o / 7
4	D r u g p e s n i n a p e v a e t	4	o O o O o O o / 7
5	K o g d a m n e o d i n o k o	5	o O o O o O o / 7
6	M a t ' l a s k u p r o j a v l j a e t	6	o O o O o O o / 7
7	K o g d a m n e o d i n o k o	7	o O o O o O o / 7
8	L i s h B u d d a p o n i m a j e t	8	o O o O o O o / 7

Ⅳ. 「不思議」（「空いろの帆」、新装版全集Ⅰ、167頁）

童謡が子供の世界を紹介する詩であるということをこの作品から実感できる。

内容 IV

原 詩	翻 訳
ふ し ぎ 不 思 議 私は不思議でたまらない、 黒い雲からふる雨が ぎん 銀にひかつてゐる <u>ことが</u>。 私は不思議でたまらない、 くわ 青い桑の葉たべてゐる かひこ 露が白くなる <u>ことが</u>。 私は不思議でたまらない、 ゆふがお たれもいちらぬ <u>夕顔が</u> ひら ひとりではらりと開く <u>のが</u>。 私は不思議でたまらない、 誰に聞いても笑つてて、 あたりまへだ、といふ <u>こと</u> <u>が</u>。	П о ч е м у <u>От чего, почему, не пойму,</u> Серебрятся капли <u>дождя,</u> С черных туч на землю <u>летя.</u> <u>От чего, почему, не пойму,</u> Шелкопряд ест зелёный лис<u>т.о.к.,</u> Но снежно-белым получится <u>ш.ё.л.к..</u> <u>От чего, почему, не пойму,</u> В безмятежной, тёмной <u>ноч.и.</u> Луноцвета видны лепест<u>к.и.</u> <u>От чего, почему, не пойму,</u> Все смеются, кого не <u>спрошу,</u> Отвечая мне лишь « <u>потому.</u> ».
1 行ずつの翻訳	ロシア語の発音
どうしてか分からない 何のためかどうしてか分からない 銀にひかっている 黒い雲から地面に飛び下る雨 のしずくのが 何のためかどうしてか分からない かいこが青い桑の葉たべているが 網が雪のように白くなること が 何のためかどうしてか分からない 静かで暗い夜の中は 夕顔の花びらが見えてくること が	P o c h e m u <u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e</u> <u>p o j m u ,</u> S e r e b r j a t s a k a p l i <u>d o z h d j a ,</u> S c h e r n y k h t u c h n a z e m l y u <u>l e t j a .</u> <u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e</u> <u>p o j m u ,</u> S h e l k o p r j a d e s t z e l y o n y j <u>l i s t . o . k . ,</u> N o s n e z h n o - b e l y m p o l u c h i t s a <u>s . h . o . l k . .</u> <u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e</u> <u>p o j m u ,</u> V b e z m j a t e z h n o j , t j o m n o j <u>n o c . h . i .</u> L u n o c v e t a v i d n y l e p e s t <u>k . i .</u>

何のためかどうしてか分からない	<u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e p o j m u ,</u>
誰に聞いても笑ってて	V s e s m e j u t s j a , k o g o n e <u>s p r o s h u ,</u>
「だから」としか答えてくれぬことが	O t v e c h a j a m n i e l i s h ' « <u>p o t o m u</u> » .

子供が、次々と質問をして周辺の大人を問い詰めるこの作品はそれを忠実に描写している。この作品の翻訳では、日本人の子供の言語的な世界観からロシア人の子供の言語的な世界観へ冒険の旅が始まる。まず、ロシアの子供のしつこい言い方を想像すると、疑問語の反復が浮かんでくる。そこで、「私は不思議でたまらない」の文法的な表現を“otchego, pochemu, ne poimu”という畳みかけるような表現に変えた。また、最後のフレーズを翻訳するには、子供と大人の会話を思い描いてみた。好奇心のある子供は納得できる答えをなんとしても求めているのに、そのことが常識となってしまう大人は面倒くさくて、一言で返答する。このような場面を思い描いて、子供の“pochemu”の一番相応しい答えは“potomu”であると考えた。

形式 IV

原 詩		音 律	
1	私は不思議でたまらない	1	1 3 (4 - 4 - 5)
2	黒い雲からふる雨 <u>が</u>	2	1 2 (7 - 5)
3	銀にひかつてゐる <u>ことが</u>	3	1 2 (3 - 6 - 3)
4	私は不思議でたまらない	4	1 3 (4 - 4 - 5)
5	青い桑の葉たべてゐる	5	1 2 (7 - 5)
6	蠶が白くなる <u>ことが</u>	6	1 2 (4 - 8)
7	私は不思議でたまらない	7	1 3 (4 - 4 - 5)
8	たれもいちらぬ <u>夕顔が</u>	8	1 2 (7 - 5)
9	ひとりでばらりと開く <u>のが</u>	9	1 3 (4 - 4 - 5)
1 0	私は不思議でたまらない	1 0	1 3 (4 - 4 - 5)
1 1	誰に聞いても笑ってて	1 1	1 2 (7 - 5)
1 2	あたりまへだ、といふ <u>ことが</u>	1 2	1 2 (6 - 6)
翻 訳		韻 律	
1	<u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e p o j m u .</u>	1	o o O o o O o o O / 9
2	S e r e b r j a t s a k a p l i d o z h d j a .	2	o o O o O o o O / 8
3	S c h e r n y k h t u c h n a z e m l y u l e t j a .	3	o o O o O o o O / 8
4	<u>O t c h e g o , p o c h e m u , n e p o j m u .</u>	4	o o O o o O o o O / 9

5	S h e l k o p r j a d e s t z e l y o n y j l i s t o k .	5	o o O o o O o o O / 9
6	N o s n e z h n o - b e l y m p o l u c h i t s a s h o l k .	6	o o o O o o O o o O / 1 0
7	O t c h e g o , p o c h e m u , n e p o j m u .	7	o o O o o O o o O / 9
8	V b e z m j a t e z h n o j , t j o m n o j n o c h i .	8	o o O o O o o O / 8
9	L u n o c v e t a v i d n y l e p e s t k i .	9	o o O o o O o o O / 9
1 0	O t c h e g o , p o c h e m u , n e p o j m u .	1 0	o o O o o O o o O / 9
1 1	V s e s m e j u t s j a , k o v o n e s p r o s h u .	1 1	o o O o o O o o O / 9
1 2	O t v e c h a j a m n i e l i s h ' « p o t o m u . »	1 2	o o O o o O o o O / 9

形式において原詩の韻はところどころ変わったりするが、1、4、7、10行は詩の形の軸となっている。翻訳では、これを必ず表すべきである。それ以外の行の組み合わせでは、自然にメロディーが成り立っている。これはロシア語で韻を踏むことで伝えられる。

V. 「こだまでせうか」(「波の子守唄」、新装版全集Ⅰ、237-238頁)

誰かと会話をする時に、こだまのような返事が聞こえてくる、ということを表現した作品。これは、子供たちの間の対話でもあり、「私」とこの世界の誰でもとの間の対話でもある。この世で発したことばや、なした行為は必ず戻ってくる。この詩を翻訳する際の一番のチャレンジは、メロディーを維持しながら、この対話の形式を自然なロシア語で創作することであった。前述したように、日本語の原詩のシンプルなことばと文法をそのままロシア語に訳すと、詩的な美しさが感じられないものになる。また、日本語のリズムを移すには、原詩よりも少し長いことばとなる。そのため、同じロシア語繰り返さないように、「言い換え」という翻訳技術を採用した(内容Ⅵ翻訳の欄の下線部参照)。その他、最後の2行が特に重要である。誰が誰と対話しているのか? 主人公と世界? 筆者と読者? 筆者の独り言? 答えは、「誰でも」である。題名となった質問がまた登場し、返事も聞こえてくる。翻訳ではメロディーの構成に従うべく、題名を質問のままにして、最後の二行を筆者から主人公や読者への呼びかけの形にした。

内 容 V

原 詩	翻 訳
こだまでせうか あす 「遊ぼう」つていふと 「遊ぼう」つていふ。	Н е э х о л и э т о ? « И г р а т ь п о й д е м » , - п о з о в е ш ь , « П о й д е м » , - у с л ы ш и ш ь . в о т в е т .

ば か 「馬鹿」 <u>つていふと</u> 「馬鹿」 <u>つていふ。</u> 「もう遊ばない」 <u>つていふと</u> 「遊ばない」 <u>つていふ。</u> さうして、あとで さみしくなつて、 「ごめんね」 <u>つていふと</u> 「ごめんね」 <u>つていふ。</u> こだまでせうか。 いいえ、誰でも。	Скажешь: «дурак», - «дурак», - <u>промчится гулкое</u> <u>вслед.</u> Крикнешь: «Играть не буду!», «Не буду», - <u>крикнут</u> <u>тебе.</u> Но оставшись с этой обидой Ты в одиноч<u>естве,</u> <u>Промолвишь:</u> «Меня прости», «Прости», - <u>попросят</u> <u>тебя.</u> И, знаешь, это не эхо, А каждый, кто слышит <u>тебя.</u>
一行ずつの翻訳	ロシア語の発音
こだまでしょうか 「遊び行こう」 <u>って誘うと</u> 「行こう」 <u>って返事してくれ</u> <u>る。</u> 「ばか」 <u>っていうと</u> 「ばか」 <u>って響いてくる。</u> 「もう遊ばない」 <u>って叫ぶと</u> 「遊ばない」 <u>って叫び返す。</u> あとで落ち込んで さみしくなつて、 「僕を許して」 <u>っていうと</u> 「許して」 <u>って頼まれる。</u> それはね、こだまではないよ それはあなた（の声）を聞い ている皆のことだ。	Ne ekho li eto? «Igrat' pojdem», - <u>pozovesh',</u> «Pojdem», - <u>uslyshish' v otvet.</u> Skazhesh': «durak», - «durak», - <u>promchitsja gulкое</u> <u>vsled.</u> Kriknesh': «Igrat' ne budu!», «Ne budu», - <u>kriknut</u> <u>tebe.</u> No ostavshis' s jetoj obidoj Ty v odinoch<u>estve,</u> <u>Promolvish':</u> «Menja prosti», «Prosti», - <u>poprosjat</u> <u>tebja.</u> I, znajesh, eto ne echo, A kazhdyi, kto slyshit <u>tebja.</u>

形式に関して言えば、原詩はことばの反復によって構成されている。ロシア語で美的印象を与えるためには、文法と語彙を工夫する必要がある。それゆえ、原詩の1-2行の反復の代わりに、筆者の露語訳では2-4、6-8、10-12行が韻を踏むようにした。

形式 V

原 詩		音 律	
1	「遊ぼう」 <u>つていふと</u>	1	9 (4 - 5)
2	「遊ぼう」 <u>つていふ</u>	2	8 (4 - 4)
3	「馬鹿」 <u>つていふと</u>	3	7 (2 - 5)
4	「馬鹿」 <u>つていふ</u>	4	6 (2 - 4)
5	「もう遊ばない」 <u>つていふと</u>	5	12 (7 - 5)
6	「遊ばない」 <u>つていふ</u>	6	10 (5 - 5)
7	さうして、あとで	7	7 (4 - 3)
8	さみしくなつて	8	7 (4 - 3)
9	「ごめんね」 <u>つていふと</u>	9	9 (4 - 5)
10	「ごめんね」 <u>つていふ</u>	10	8 (4 - 4)
11	こだまでせうか	11	7 (3 - 4)
12	いいえ、誰でも	12	7 (3 - 4)
翻 訳		韻 律	
1	«Igrat' pojdem», - <u>pozovesh'</u>	1	o O o O o o O / 7
2	«Pojdem», - <u>uslyshish' v otvet</u>	2	o O o O o o O / 7
3	Skazhesh': «durak», - «durak»	3	O o o O o O / 6
4	<u>promchitsja gulkoe</u> <u>vsled</u>	4	o O o O o o O / 7
5	<u>Kriknesh': «Igrat'</u> <u>ne budu!»</u>	5	O o o O o O o / 7
6	«Ne budu», - <u>kriknut tebe</u>	6	o O o O o o O / 7
7	No ostavshis' s jetoj obidoj	7	o o O o O o o O o / 9
8	<u>Ty v odinochestve</u>	8	O o o O o o / 6
9	<u>Promolvish':</u> «Menja prosti»	9	o O o o O o O / 7
10	«Prosti», - <u>poprosjat tebia</u>	10	o O o O o o O / 7
11	I, znajesh, eto ne echo,	11	o O o O o o O o / 8
12	A kazhdyi, kto <u>slyshit tebia</u>	12	o O o o O o o O / 8

5. おわりに

金子みすゞの童謡の露語訳において多数の問題点に直面したが、さまざまな変換や解説の添加により、翻訳はある程度成功したのではないかと思う。原詩の文体とことばを変更することが多かったが、詩人が作った形式、メロディー、そしてイメージを露語訳で現すことができた。しかし、より正確な翻訳を提示するには、金子みすゞの童謡についてのさらなる研究に加え、日本詩歌の伝統とロシア詩歌の伝統の比較が必要とされる。特に、日本詩歌の音楽性（金子みすゞの童謡の音楽性、および七五調の取り扱い）とロシア詩歌の韻律を比べながら、原詩のメロディーを翻訳することを試みたい。そして、童謡というジャンルの歴史的な背景、テーマ、詩的な構成についても考察していきたい。教育の視点も重要である。そのような研究を踏まえて、ロシア語への翻訳の方法を改善し、その精度を一層高めることに努めたい。

本論と、以上のような研究に基づいて今後発表する論文を理論的ベースとして、将来、金子みすゞの童謡のロシア語翻訳集を制作することを計画している。また、外国人の感覚で受け止めた金子みすゞの作品研究を提示することで、日本人の文学研究者のみならず、一般読者にもなじんでいる詩に、新たな気づきをもたらすことができるのではないかと期待している。

注

- (1) 金子みすゞの翻訳は、英語や中国語、韓国語、モンゴル語、ポーランド語等に翻訳されている。とりわけ英語訳には以下のものがある。1) *Are You an Echo?: The Lost Poetry of Misuzu Kaneko*, by Misuzu Kaneko (Author), Toshikado Hajiri (Illustrator), Sally Ito (Translator), David Jacobson (Translator), Michiko Tsuboi (Translator), Setsuo Yazaki (Foreword), Chin Music Press Inc., 2016; 2) *Shell of Moon and Sun Poems by Misuzu Kaneko: translated by Yukari Meldrum and Alice Major*. Independently published, 2019; 3) *Mayumi Itoh. Kaneko Misuzu: Life and Poems of A Lonely Princess*, Independently published, 2018.
- (2) 桑名真吾『写真家＝翻訳家としてのウォーカー・エヴァンズ「詩情は翻訳されえない」のか』*Phantastopia*第2号, 2023年3月, pp 1-18.
- (3) Chukovsky, K. *Vysokoye iskusstvo. Printsipy khudozhestvennogo perevoda* [Fine Art. Principles of Translation of Fiction]. Azbuka-Klassika. Non-Fiction, 2001. [in Russian]
- (4) Lotman, YU.M. *Analyz poeticheskogo teksta* [Jury Lotman. 1976. *Analysis of the Poetic Text*. (Translated by D. Barton Johnson.) Ann Arbor (Mich.): Ardis. ISBN 978-0-88233-106-5]. [In Russian] URL: <http://www.studfiles.ru/preview/1101601/>

page:2/ (2023.10.9 参照)

- (5) *Etkind, E.G. Poezia i perevod. [Poetry and Translation]. Soviet writer, 1963. [in Russian]*
- (6) 注3と同じく。
- (7) *Dolin, A.A. Yaponskij romantizm i stanovlenie novoj poezii. [Japanese Romanticism and Establishment of New Poetry]. Nauka, 1978. [in Russian]*
- (8) *Kolker, YA.M. Poeziya i proza hudozhestvennogo perevoda. [Poetry and Prose in Translation of Fiction]. Gumanitarij, 2014. [in Russian]*
- (9) 松本侑子『金子みすゞと詩の王国』(文春文庫、文藝春秋、2023年)、松本侑子『みすゞと雅輔』(新潮文庫、新潮社、2020年)、矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』(JULA出版局、1993年)、今野勉『金子みすゞ ふたたび』(小学館、2011年)。
- (10) 高橋美帆「女性詩人の葛藤——クリスティーナ・ロセッティと金子みすゞ」『ヴィクトリア朝文化研究』4号、2006年11月、p.54-67。
- (11) 坂野信彦『七五調の謎をとく—日本語リズム原論』大修館書店、1996年。
- (12) 金子みすゞ『新装版・金子みすゞ全集』(全3冊) JULA出版局、1984年。
- (13) 『世界大百科事典』URL: <https://japanknowledge-com.hawkingl.agulin.aoyama.ac.jp/lib/display/?lid=102005214000> (2023.12.13参照)

参考文献 (引用しなかったもの)

- (1) 金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』JULA出版局、2022年。
- (2) 畑中圭一『日本の童謡—誕生から九〇年の歩み』平凡社、2007年。
- (3) 矢崎節夫、玄侑宗久、片岡鶴太郎、里中満智子、荒了寛『ことばの花束 金子みすゞのころ』佼成出版社、2002年。
- (4) 矢崎節夫『金子みすゞ・ことばのまど あなたはあなたでいいの』ポプラ社、2005年。
- (5) 矢崎節夫『みすゞコスモス—わが内なる宇宙』JULA出版局、1996年。

(すべとら一な・じがちょーわ／本学大学院科目等履修生)